

視るにしも今こそ君は此道絶たむ公性のやを最見察しくりぬる
あり呼根りの安土城やと腰を披りし紙筆把出昂時に一首此歌を題く

公志すぬ人を何ともいふべし身をも惜まば名成をおしまば

道を急いぐ主役備ふ坂本の城に立歸りぬ此時歳蘭丸へ信長公の所前

へ出密に言状したてまつる只今光秀が態をいふ謀叛をこおやえの臣

所許を象らば自然小光秀を斬て弄まうらんと思投て見えけるは

其ハ赤いつるも忍をど訊録をへも蘭丸振く只今明智光秀が登城せ

顔色といひ今朝飯時を疑ひしはに哺ら飯を嚼むふ中沈吟し在

りしか持たる箸を取落したまふ要時ハ覺えべ忙然たり斯まで心状累

はさる正しく天下の一大事を想起のれいららん光秀従来君を恨ま

らさるると屢くこれを評断すまは登るべと諫言せたる眼力ハ

大張智勇の胤子なり然やとも明智光秀ハ坂本の城に歸着し城代

明智十平次光秀の伯父也あつびに三宅武部奥田官内山本對馬守諏訪飛

騾守秋篠内務介伊勢與之介村越三十郎倭を呼集め密に安土の次

舟を詰譚既に謀叛と決むたるが各の心底い人との間に是れは

金借し信長を怨むと基どつたれば奉て叛逆せ初めたる由を究電し

我を誅するが傍く皆く逆意に凝固せしむ其公はこと渡り初るは時

光秀指揮したる中明智左馬助同治志勝の四王天但馬守並河津

倭丹波の武士を伴ふ急に龜山の城に到り龜本山城を隈波み舟を

よハ密に遠意を重所せ其餘の衆小出雲石見此評領地へ赴くを

披露して晦日ぐりに急く龜山城へ軍勢を集めしるに指揮を受

並河四王天倭又月廿四日の三更をり丹波の國へ趣ひたり光秀ハ廿七日